

有島武郎の自殺

—近代日本思想史の一断面—

岡 本 道 雄

I 有島の自殺と内村の批判

有島武郎は大正12年の夏、軽井沢の山荘で愛人波多野秋子と情死した。一代の流行作家であり、また、たぐい稀なる国際的教養と清廉純潔な人柄の持主として青年達の尊敬をあつめていた人であっただけに、彼の死は世に大きな衝撃をあたえ、その死と死因をめぐる多くの論議がかわされた。流行作家として人気の頂点にたっていた彼には一見何らの自殺への必然性もないと思われたので、当時の人々には彼の死は謎であり、またそれだけに驚きも大きかったが、すでに大正5年に妻にさき立たれ、孤独と寂寥をかこっていた有島が、美貌の人妻の誘惑に破れ、またその性格も人一倍清潔でストイックであっただけに遂にはこの関係を清算すべく死を選んだとするのが大方の解釈であり、彼の死に同情のあつまった所以でもあった。

しかしわれわれはこの有島の死に対し、当時の数多くの同情的批評にまじって、彼のかつての師内村鑑三の厳しき批判があつたことを忘れることはできない。内村は当時の「万朝報」に「背教者としての有島武郎氏」と題してこう語っている。

有島君には大なる苦悶があつた。此苦悶があつたらばこそ彼は自殺したのである。そして此苦悶は一婦人の愛を得んと欲する苦悶ではなかつた。此は哲学者の称するコスミックソロー（宇宙の苦悶）であつた。有島君の棄教の結果として、彼の心中深き所に大なる空虚が出来た。彼は此空虚を充すべく苦心した。彼は神に依らず、キリスト其他の所謂神の人に依らず

して自分の力で此空虚を充たさんとした。此が彼の苦悶の存せし所、彼の奮闘努力は茲に在ったと思う。……彼は種々の手段を試みた。著作を試みた。共産主義を試みた。そして多くの人、殊に多くの青年男女の渴仰を得て、幾分なりとも此空虚を充たし得たと思ったであろう。然し乍ら彼は人の賞讃位で満足し得らるる人ではなかった。彼は社会に名を揚げて益々孤独寂寥の人となった。彼は終に人生を憎むに至った。神に降参するの砕けたる心は無かった。故に彼は神に戦いを挑んだ。死を以て彼の絶対的独立を維持せんと欲した。自殺は有島君が近来屢々考えた事であろう。但し其機会が無かったのである。

そして其機会が遂に到来した。一人の若き婦人が彼に愛を献げた。著作に於ても、社会事業に於ても、衷なる空虚を充すの材料を発見する能わざりし有島君は、此婦人の愛に偽りなき光を認めた。彼は歎んだ。満足した。此は棄教以来初めて彼に臨んだ光であった。寔に小なる光であったが、永の間暗黒に彷徨せし彼に取っては、最も歓迎すべき光であった。彼は既に人生を忌みし者、而して婦人は夫有る身であった。此光は逸すべからず、然ればとて此世に於て之をエンジョイする能わず、故に二人相併んで自ら死に就いたのである。正直なる有島君としては為しそうな事である。然し彼は大に誤ったのである。……「人は自分の為に生きず又死せず」と有島君の棄てた聖書に記いてある。生命は自分一人の有であると思ふは大なる間違いである。……背教は決して小事ではない。神を馬鹿にせられる。…

人の子の智慧も^{ちから}才能もなにかせん

神を棄れば死ぬばかりなり¹⁾

有島の死をその直接の動機において考えるならば、唐木順三氏の語るごとく、「妻の不貞を種に金銭を強要する夫に習俗中の習俗を感じ²⁾」これに反抗して死において恋愛を美化せんとしたことがあげられるかもしれない。また晩年の有島は社会主義に関心をもち、北海道狩太の農場を解放し、理論と実行の一元化をはからんとしたが、しかし『宣言一つ』にみられるように、自分がいかに無

産者に同情をもとうとも、自分はいくまで知識階級であって無産者ではありえないという彼の立場上の矛盾と悩みが、彼を挫折せしめ、死へ追いやったのかもしれない。

だが有島の死を彼の思想構造との関連において眺めるならば、確かに有島の死は、内村によって鋭く指摘されたごとく、棄教の結果生じた空虚をうめんとする戦に挫折した「背教者の死」とよばれてよい一面をもつ。彼の死の直接の動機・原因が何であったかをいかに問うても、われわれはいくまで推則によってしかこれを知ることが出来ないが、このような直接の動機が何であれ、それをうながした誘因を彼の思想と行動の中にさぐろうとするならば、われわれはここに彼の死の誘因と遠因がキリスト教の棄教にあったことを認めざるをえないのである。

II キリスト教への入信と離脱

明治・大正の知識人に見られる一つの注目すべき現象は、彼らのなかには一度キリスト教の門をくぐり、やがてはこれから離れた人々が多いという事実である。北村透谷、国木田独歩、島崎藤村、正宗白鳥、魚住折廬、また徳富蘇峰、横井時雄、木下尚江、片山潜等多くの名前がただちに浮んでくる。そして有島もまたこのような一人であった。こうした人々はなぜキリスト教を求め、またキリスト教から離れていったのか。

明治初期の多くの青年達にとって、明治維新の創業と近代国家の成立は、この国家の理想に自らの理想をたくすべき筈のものであった。しかし、明治政府による「富国強兵」の国家理念が明確になり、また、明治政府の国家主義的性格が次第に明瞭になるにつれて、彼らのいくらかは、もはやこの政府には期待をもちえない。あるものは、自由民権運動に身を投じ、政治的変革に彼らの夢をたくするが、明治政府の基礎が強固に確立し、彼らの理想が実現できないと分かった時、また彼らがこの運動のテロ化についていけなくなった時、彼らに残されたのは空虚なる虚無だけであつた。

このような彼らの前にあらわれ、彼らを再生せしめただけでなく、国家から精神的に離脱せしめたのがキリスト教であった。明治23年の教育勅語の成立と、その儒教主義的・国家主義的解釈によって、天皇及び国体の神格化が基礎づけられた時、これに公然と批判と非難を与えたのが、キリスト教徒のみであったことをおもえば、これらの明治の青年達が、キリスト教によって国家を批判し、国家から精神的離脱をはかる観点を得ることが出来ると考えたのは当然である。そしてこのような形でキリスト教に入信した代表例は北村透谷であり、また少し遅れて魚住折廬である。彼らは国家からはなれたところで個人の理想を追究し、心情の純粹性を求めようとする。しかし彼らはやがてキリスト教から離れることになる。というのは、当時彼らが接したキリスト教は、カルヴィニズムやメソジストに基づく倫理的な色彩の強いものであり、事業や功業を重んずるものであったので心情の純粹性を求めてキリスト教に近づいた彼らはやがてはキリスト教に反発し、自分の心においてのみ神と交わることを求め、さらにはキリスト教を棄ててローマン主義的な自我の追究に向うのである。³⁾

しかし透谷や折廬のように、心情の純粹さを求めてキリスト教に入信し、また離脱するといった例は、どちらかといえば先駆的であり、むしろ特殊に属する。そして多くのキリスト教入信者にとっては、まだこの時代には、国家からの精神的離脱もそれ程明確な問題意識とはならず、それはむしろ、明治末期から大正初期の問題となる。

それ故、より一般的にはわれわれは、明治・大正の知識人のキリスト教の受容と離脱には、今一つの面があったことを指摘することが出来る。それは先にふれた当時のキリスト教の倫理主義がそのまま容認されキリスト教が極めて倫理的な理想として宗教本来の次元においてよりも倫理の次元で捉えられ受容されたということである。そしてまた、倫理の次元においてキリスト教からの離脱が起ったということである。この傾向は明治においては所謂「能本バンド」の人々の信仰把握の中に、その原初的な形をみることができる。例えば、小崎弘道や海老名弾正においては、キリスト教は従来から信じられて来た「儒教の

精神の真意を成就するもの⁴⁾であり、また儒教主義の所謂「縦の倫理」に対して、「神の前での万人の平等」「隣人愛」といった形での「横の倫理」を含む優位な道德であるとして受容れられ、それは道德とは質的断絶をもつ福音として受容れられなかったのである。そしてこの様な信仰把握が、後になって日本倫理や儒教とキリスト教の折衷を可能にし、またこのグループの人達の中から横井時雄、金森通倫等の離脱者を生み出すことになる。また一度キリスト教に入りながらも、キリスト教倫理の非実践性にあきたらず、これに代る行動の原理として、唯物論的な社会主義倫理を選ぶ一群の人々(片山潜、大杉栄等)も、同様なキリスト教的理解の上に立っていたと言えよう。

しかし、われわれが、この様な倫理的なキリスト教の受容と離脱の一例を、明治末期から大正にかけて求めるならば、ここに有島があらわれてくる。

有島は幼年期に、当時横浜の税関長であり、国粹主義者であった父から極めて厳格な武士風の教育をうける。16才の時、一時妹と共に預けられた外祖母の家でかつては自力宗の信者であり、当時は熱心な浄土真宗の信者であったこの外祖母によって、はじめて宗教的雰囲気を感じ「一心」と「克己」の重要性を教えられる。そして札幌へ行ってからも、この祖母のすすめによって、宗教的体験を深化しようとして、規則正しい参禅の生活を続ける。そしてこれらは、キリスト教入信前の有島の精神生活に影響をあたえた重要な要因であろう。しかしわれわれは、この様な有島の少年時代の経験の中に、彼自身の終生かわらなかつた倫理的なストイックな性格が養われたことを知るのである。そしてまたこのことによって、有島がキリスト教に入信し、やがてはこれから離脱する11年の信仰生活を通して、彼が極めて倫理的なまたストイックな仕方でキリスト教を求め理解していたことをも首肯しうるのである。

有島の札幌での生活において、彼は遠縁にあたる新渡戸稲造の家に寄宿し「聖書」やカーライルについての講義をきく。また当時札幌の独立教会の事実上の指導者であった内村鑑三の人物に関心をいだき、その「東京独立雑誌」を読み、これらの影響を通して、キリスト教に関心を抱きはじめる。しかし有島

を入信に導いた決定的な出来事は、親友であり既にクリスチャンであった森本厚吉の神の存在に疑をもつ精神的煩悶に同情し、鉄砲自殺をはからんとするに至った出来事であろう。有島は森本の精神的悩みを救うためには、自分自身が本当に神を知りその神の愛を森本に分つ外はないと考える。しかしその神は彼にはない。それ故彼は、死の極限にまで自己をおいやり自己をつきとめることによって、神を知ろうとするのである。「余は死を前に置いて考へん。人の死ぬ時其声や宜しといへり。こも亦果して信ずるに足るや否やを知らずと雖も、兎に角余は兄に死別をなすを此際の最も得策なる事と考ふ。而して死に臨んで考えて果して神の存在を心の中に知る事を得ば之れを以て君に遺品となさん……若し余が一死にして果して森本兄の心を翻す事を得ば余の本懐將た何にか若かん⁵⁾」(明治33年2月15日)『観想録』という言葉、又「我は明日を期して神を知るべき身なり、嗚呼、自殺すべき身なり」(2月16日)⁶⁾という言葉は、この間の彼の決意を物語っている。しかし有島のこの決意は森本の知るところとなり、遂には二人相共に死なんとして死所を定山溪に選ぶ。

この自殺は、結局は未遂に終る。しかし死に直面した有島は「宗教的有頂天」ともいうべきエクスタシスを経験するのであり、「神は未だ真に我れに来らずとするも」「神は万物にLife⁷⁾を与ふるもの」(2月21日)であることを実感し、deathを世に来たさんとする悪魔と闘わんがために断然キリスト教徒たらんと決意し、入信するのである。(明治33年)

だがわれわれは、有島の入信に関して、今一つの面に注目せざるを得ない。それは、有島がたとえ祖母によって宗教に関心をもち、親友の悩みを契機として、キリスト教に入ったとしても、有島自身を動かして宗教を求めさせた内的動機は何であったかということである。そしてそれは性慾との克闘であった。祖母によって「克己」を教えられ、人一倍ピュリタンの生活を求めていた有島にとって自己の体内を駆けめぐる性慾は、一つの矛盾であった。そしてこの矛盾を克服するために、それだけ激しく宗教を求めキリスト教もかかる観黒から求められたのである。

しかしキリスト教に入信した後も有島はこの性慾から解放されはしない。彼は神に祈り、聖書を学ぶことを通して清い生活をなし性慾を克服せんとするが、彼が聖書に従わんとすればそれだけ聖書との戦いは益々激化する。

有島は、この性慾の問題に生苦しみ抜く。そして霊か肉かという問題が絶えざる課題として彼にあらわれてくる。彼が信仰に疑いをもったのも、信仰によって性慾を霊的なものに純化し得ないという悩みを含んでいたといえるし、又彼がこの性慾の純化への期待をもって始めた神尾安子との結婚も、結局は「天下晴れて肉の楽しみを漁る⁸⁾」ものに過ぎないことを知って失望する。そして彼はキリスト教を棄てた後もこの霊か肉かという問題を問いつづける。有島の代表作『或る女』は、有島が主人公葉子を通して人間におけるこの性慾の跳梁を執拗に追究したものと言えよう。

だがこの様に有島が入信時においては性慾の問題をその内的動機とし、又入信後においても、聖書によって性慾の純化を目指していたということは、観点を元へ戻すならば、有島の信仰生活が極めて倫理的な色彩を有していたことを示す様に思われる。そしてまたわれわれが、有島の日記（『観想録』）を通して知るところでも、彼の信仰生活は、専ら神乃至は聖書のおきてを守り得ない自己の罪、あるいは道徳的なルーズさを、神に懺悔するという形で営なまれている。

しかしながら人が倫理的な態度でもってのみ宗教に近づこうとするならば、宗教のもつパラドックスは、不条理なものとして耐え難く目に映るであろう。また神の愛や恩寵の体験なしに神の絶望的命令を守ろうとすることは、人間のいかなる倫理的努力をもってしても及び難い重荷を課することになるであろう。自己を超えた「道徳法則」をあくまで守り続けようとする「倫理の実存」が、結局はこの法則を守り得ない自己を発見して絶望するか、あるいはこの守り得ない法則を無視して傲慢におちいるかのいずれかであることは、すでにキェルケゴールによって示されている。そしてこのことは、有島においてもあらわれてくる。

有島は、明治35年、1年の軍隊生活を終った頃から、自己の信仰に次第に懷疑をいだき始め、その翌年米国留学に及んで、この問題を徹底的に考えてみようと決心する。そして、1年の思索の末に、自分が本当の信仰を持っておらず、「本当の信仰上の変身を経験をしていない」（『リビングストーン伝の序』）ことを、深い悲しみと共に告白する。そして同時に、彼のキリスト教に対する懷疑を四つの言葉で表わしている。

- 1, 私は宇宙の本体なる 人格的神と直接の 交換をした 事の 絶無なのを知った。
- 2, 基督教の罪という 観念及び之に 附随する 贖罪論が 全然私の 考えと 相容れない 事を知った。
- 3, 未来観 に対して、 疑問を 抱き出した。
- 4, 日露戦争によって、基督教国民の裏面を見せられた。⁹⁾（『リビングストーン伝の序』）

有島は、この出来事によって実質的には信仰を捨ててしまう。しかし、彼の外面的な信仰生活即ち札幌独立教会での教会生活は、彼の帰朝後、明治44年まで続いて行く。だが一旦信仰を捨てた有島には、この教会生活は重荷であり、彼のその後の苦悩も、ここに始まったといえる。

Ⅲ 棄教後の精神生活と二元の立場

有島が、米国留学中に、実質的信仰を捨てた時、それに代って最も大きな比重で、彼の心を奪ったのは「文学」であった。彼は元来芸術には関心をもっていた。しかしそのストイックな性格の故に「神の道を歩まんとするものに」とっては、芸術は「遊戯」であるとして、その衝動を退けてきた。しかし今や「文学」は、信仰に代るものであった。彼は、トルストイを読み、イブセンを読み、クロボトキンを読み、またホイットマンやエマソンを読んだ。その結果、彼は、「是れまで外界の因縁の 為めに、四分五裂していた自分というものが寄せ集められて、自分に帰って来るのを感じ出した。……神の信仰の中に見出

し得なかった本当の自分の姿を、人間らしく文豪の作品の中に見出すのを知った。¹⁰⁾ (『リビングストーン伝の序』傍点筆者) のである。文学を本業とするか、文学愛好者としての教師に留まるかは、別として、文学を通して「自己」を生かそうという決心は、この時に定ったのである。

しかしわれわれは、彼の留学中の今一つの出来事として、金子喜一との出会いに、注目しておかねばならない。彼はここで初めて社会主義にふれる。そして、貧富の懸隔の甚だしき現代において、キリスト教倫理は、無力であるだけでなく、富者を擁護するものであると批判し、これに代るべきものとして、唯物論を評価する。そして、有島が信仰を棄てた一因は、ここにもあるのであり、又後年彼が『宣言一つ』において、知識階級としての自己に限界を感じながらも、労働者階級に期待をかけ、又彼自身私有農場を解放し、これを共産農園となさしめたことの種も、既にここに播かれていたと云うべきであろう。

さて、この様な留学経験を経て、帰国した有島を待受けていたのは何であつたらうか。彼は帰国の翌年(明治41年)母校札幌農科大学の予科に奉職する。ここで彼は、国際的教養をもった少壮学者として非常な期待をもって迎えられただけでなく、過去を知る師友達によって(内村鑑三や森本厚吉等)、熱心なキリスト教徒として、再び教会生活(札幌独立教会)の中に送り込まれる。

だがしかし実質的に信仰を失っている有島には、この教会生活は、重荷以外の何物でもない。この時期の有島の心の中には、教師としての外面的成功にも拘らず、信仰を失って尚教会という因襲に従って生きている自己、世間体の為に働いている自己に対する嫌悪が次第に深まって行く。その上、この時期の有島には、結婚問題や父親の圧力等を通しての家族制度の重みが因襲的な外的拘束力として加わってくる。そしてこの年の五月、有島の精神状態は極度に悪くなり、彼は5月3日の日記に、第2回目の自殺への誘惑を思わせる様な次の言葉を英文で記している。「余は、今朝連発式ピストルを購入した。余の魂が、余から離れる。余の魂は、余の最も忌嫌ふことをなしている。恐るべきことだ。(訳文筆者)¹¹⁾」

しかし、翻えて考えてみるに、有島が留学中実質的に信仰を棄てたとき、彼は「文学」に熱中することによって「自己」即ち「本当の自分」を見出した筈ではなかったか。帰国後のこの様な重苦るしい空気の中で、有島によって「自己」は、どの様に追究され生かされようとしていたのだろうか。また「自己」を生かすものとしての「文学」及び「社会主義」はどの様に問題になって行くのであろうか。

留学から帰った有島にとって、当然「自己」という問題は、最も重要な問題であった。彼は、自己の創作能力に疑問をもち当分の間教師として、又文学愛好者として生きる道を選んだのであったが、文学を通して「自己」を生かすという希望は持ちつづけられている。しかし、留学中彼が発見したと思っていた「自己」は、いわば真空の中で考えられた「自己」であった。そこには何らの外的拘束力もなく、観念の世界で生かされた「自己」であった。しかし帰国後の有島にとって、教会生活や家族制度の問題が、現実の重みを加えるに及んで、「自己」は思わぬ圧迫を受けることになる。

だが、このことより更に重要なのは、この当時の有島には、未だ生かすべき「自己」が何であるかが分っていないことである。有島が実質的には、信仰を棄てたことによって彼には再び性慾の問題が重大な問題としてあらわれてくる。かつては、信仰を通してこれを純化し、捨てさろうとしていた性慾が、再び「自己」の一部として復帰し、生かされるべきことを要求する。そして彼の芸術的衝動は、これを肯定し、性慾を含めた「本能」が「自己」の中心であることを主張する。しかし一方、信仰は棄てたけれど彼の性格構造の中には、ストイシズムが残り、これが性慾を嫌悪し、尚、靈的な純潔な生活を望んでいる。そしてこの両者が二元的に激しく対立し、彼はこの矛盾に悩む。彼は信仰にかわって自らの思想と行動を統一する何らかの原理を求めて悪戦苦闘する。

しかし、やがて彼は『二つの道』及び『も一度二つの道に就て』（明治43年）を発表することによって、この様な二元的な、また矛盾した立場をそのまま肯定¹²⁾することを表明する。そして習慣の拘束に尚捕われながらも、理智の立場に

において、自己の内的な二元の対立及び矛盾に迷い抜き、人生に対し「最も聰明にして誠実な態度」¹³⁾（『二つの道』）をとったハムレットの立場に、有島は自己に近いものを感じて深い共感を抱く。しかし、また彼はこのような内的矛盾を抱きながら、これを悩むことなく外界の圧迫に対して、あくまで戦ったヘダ・ガブラーをも引合いに出す。そしてヘダのもつ本能的なものに嫌悪を憶えつつも、「絶対的観念に暇乞いして」「相対界」に生きる人間が「自己」に立ち帰り、「自己の建設と確立」¹⁴⁾を目指すためには、理智の立場で悩むハムレットよりも、内部の矛盾を当然のこととし、外界と戦い抜いたヘダ・ガブラーの立場により徹底したものを見出すのである。

一方有島は、この『二つの道』を発表した明治43年に、弟生馬の友人であった武者小路実篤や志賀直哉達によって始められた「白樺」の運動に加わる。そして教職のかたわらではあったが、しだいに創作活動をはじめ、これを発表して行く。そして有島の代表作となつた『或る女』の前篇が『或る女のグリンプス』と題して『白樺』誌上に発表されるのもその翌年の1月からである。そしてそれ故に、われわれはこの『或る女』の前篇の中に『二つの道』の具体的な展開を見ることが、出来ると思う。この作品の後篇になると「本能」というもののより積極的な肯定があらわれてくるが、この前篇では、有島におけるストイシズムと性慾、霊と肉との二元的克闘が生々しく描き出されていると思われるのである。大きくは、有島が自らを模したと云われる古藤と主人公葉子とが夫々有島のストイシズムと性慾を代表していると云えるのであろう。しかし、また古藤が葉子について「明白に云うと僕はああいう人を一番きらいだけれども同時に又一番牽きつけられる。僕はこの矛盾を解きほぐして見たくなくて堪らない」¹⁵⁾と語っている言葉は、古藤自身の内にもこの二元的矛盾があることを示しているし、さらに有島は葉子においてヘダ・ガブラーを模して、二元的矛盾の徹底した姿をそこに描き出そうとしているとも言えるであろう。

有島は、この様に二元の立場を肯定して行く。しかし、われわれはこの二元の立場の肯定が現実の有島においては、明るき精神状態の下になされていたと

思うことは出来ない。期待をもって始めた結婚生活への失望が、妻との間に、精神的克鬪を引き起し、しばしば離婚が考えられた。彼が大正2年に発表した『An Incident』は、この間の妻との争いの重苦しさを描いた一例であろう。また彼は、自らを外的な拘束力や習俗的な生活から解放するために、明治44年、34才の時、尊敬する内村の引きとめをも振り切って札幌独立教会を去り、11年の信仰生活に名実共に終止符を打つ。しかし現実に教会生活を離れた時、彼を襲った精神的空虚感、孤独感は意外に大きかった。習慣的にせよ続けられていた教会生活は、彼の外的拘束力であっただけでなく、彼を支えるものであったのである。有島は、大正4年農科大学の教職をも辞してしまう。

しかし、この様な有島を一層の精神的孤独に陥らしめたのは、大正5年における妻の死であろう。妻が死病にとりつかれて、有島ははじめて妻への愛を発見する。そしてそれだけに、妻の死は彼には大きなショックであった。有島が、大正6年に出版した著作等の第一輯が『死』と名付けられ、その中に『お末の死』『死と其の前後』という死に関する二つの作品が収録されていることは、有島の妻への愛措の念を物語っていると共に当時の有島の精神状態をも示している様に思われる。

IV 愛己主義の発見

この妻の死は、彼の大きな転機になった。彼は「いつまでもいい加減に、自分をごまかしてゐられないと思った。……思切¹⁶⁾って自分を主にする生活に這って」(『リビングストーン伝の序』)行こうと思った。そして「過去は何うであれ、又他の人達は何とも云へ、私達は、暗い過去から抜け出して明るい自己を見出さなければならない。ひがんで物に対するいぢけた心から先づ自己を救い出さねばならない」(『自己と世界』¹⁷⁾)と決心する。かくて有島は、『自我の考察』(大正5年)『自己と世界』(大正7年)『内部生活の現象』(大正9年)『惜みなく愛は奪う』(大正9年)等の一連の論文において、積極的に「自己」を追究し、自己の立場を体系化する。

この段階における「自己」の追究において、有島は二元の立場を棄てて「生活を一元に還元¹⁸⁾」しようとする。霊か肉かという二元的矛盾に悩み、自己を疑うのではなく、勿論世界を気にして生きるのでもなく、「魂の全要求、魂の全命令に謹んで耳を傾け」ながら「魂の生長を心懸け¹⁹⁾」る。霊と肉とは、彼がかって考えていた程分化したものではない。一見肉慾の遂行と思われるものも霊と関係をもつし、また一見霊に属すると思われるものも、肉から離して考えることは出来ない。それ故、この両者を含む魂の要求を全体として受容れ、「魂の誇りがなる時、誇りがとなり、魂の謙遜となり、魂の愛する時愛し、魂の悪む時悪み、魂の欲する所を欲し、魂の厭う所を厭う²⁰⁾」（『内部生活の現象』）ところに、生活を一元化する自己が見出し得ると考えるのである。

かって有島は『二つの道』において、この「二つの道」が、色々な名によって呼ばれることを語っていた。それは、霊と肉と呼ばれると共に、ヘレニズム・ヘブライズムと呼ばれるとも語っていた。このことは、言葉を換えれば「自己を主とすべきか他己を主とすべきか²¹⁾」という二元的対立である。しかし一元の立場に立つ有島は、「自己を主とすべき道」を選ぼうとし、「他己」や「世界」が生かされるためには、先づ「自己」が生かされねばならないとする。そして、ここに有島は、「自己」を生かすものとして、「愛己主義」という思想を展開する。

有島にとって「愛」は「本能」である。しかもそれは「野獣の本能でもなく、又天使の本能でもなく」、人間の本能であり、人間にあらわれた最も純粋な本能でなる。従って、そがは単なる肉ではなく、肉と霊の密接な結びつきにおいて現われる「本能」である。また「愛」は、普通パウロによって言われた「惜みなく与える」愛²²⁾であると考えられている。しかし、人間は自己を反省してみると他者よりも先づ自己を愛していることに気づくのであり、また、たとえ自己が他者を愛撫し、他者に対して自己と自己の所有を無限に与えている様に見える場合でさえ、よく考察してみると、その他者は愛されれば愛される程次第に自己自身の生活の中に入って、自己自身と同一化されて来るのである。即ち、

他者は次第に自己自身の中に摂取され「奪われ」、畢竟他者に与えられていると見える愛は、自己に与えられているに過ぎないのである。そして、このことを逆に云うならば、人は自己に対して愛を感じずる故にのみ自己と交渉をもつ他者を愛することが出来るのである。

それ故、愛は「与える本能」ではなく「奪う本能」であり、愛の本質は愛他ではなく愛己である。そして愛は他者から徹底的に「奪い」他者とその所有を自己の内に摂取することによって、次第に自己の内容を豊富にし、自己を拡充して行く。言葉を換えるならば、人はこの愛によってのみ自己の生長と完成を成就することが出来るのである。

これが有島の愛己主義の立場である。そしてまた有島における「自己」の一元化は、この愛の本能の生活においてなされんとするのであり、更に彼の『惜みなく愛は奪う』においては、この愛の本能の生活が、「習性的生活」及び「知的生活」との関連において位置づけられ、体系づけられ、ここに彼において追究された「自己」は一応完成した姿をみせるのである。

そして、一方大正六年から始った彼の多彩な創作活動も、この「自己」追究と関連をもつ。彼にとって、「芸術」乃至は「文学」は、もはや自己の余裕が考え出す「遊戯」ではなく、愛の本能を生かす「生活」そのものであり、それ故彼は力のおよぶかぎりこの創作活動に自己を賭けようとするのである。

V 死への傾斜

ここまで、われわれは、有島の死に対する内村の批判を出発点としながら、有島のキリスト教への入信と棄教の過程をたどり、有島が棄教後の孤独感、空虚感に悩まされながらも、「本当の自分」を見出そうと懸命な努力を続けて来たことをみたのであった。そして、愛己主義の立場において、有島における「自己」は、少くとも思想の上では、生活を一元化すを原理を打建て得たのであった。

しかし今われわれは、有島が『惜みなく愛は奪う』の完成後三年の大正12年

に自殺した事を思うならば、有島の懸命なる努力にも拘わらず有島の打ち建てた「愛己主義」は、真に有島の生活を一元化し得ず、有島は、自己を確立する戦に破れ、その挫折の結果が、彼を死に到らしめたのではないかという疑いを抱くのである。

結論的に云うならば、確かに彼の死はこの様な挫折の結果であったと云ってよい一面をもつ。言葉をかえれば棄教の結果の空虚感が、彼の死の遠因なると云ってよい一面をもつのである。

では、それ如何にしてか。われわれは、このことを、最後に大正という時代の精神構造及び社会主義との関連において簡単に把えてみようと思う。

大正という時代の精神構造を与える場合、われわれは既に日露戦争の直後から大正の時代を性格づける様な胎動が始っていたことを知らねばならない。富国強兵、和魂洋才を理念とする近代日本国家体制の国家主義的な歩みは、既にその基礎をすえ終って堅実な進行と発展を続けていたと云えようが、国家を通しての理想の実現には、既に期待をかけず、これから離脱したところで、理想の追究を目指す一群の若きインテリゲンチヤが次々と出現したのが、この時代であった。それはすでに、北村透谷等において先駆的にみられた問題意識であったが、これが多くの知識人の問題となりえたのはこの時代である。

彼らの基本的態度を一言でいうならば、それは従来 of 日本に支配的であった国家主義を否定して、国家や民族という「種」を媒介とすることなしに、「人類」及び「普遍的なもの」といった「類」と「個人」とを直接結びつけようとするに²³⁾あったといえるであろう。

一方では、この時代における夏目漱石の活発な創作活動に刺戟され、その門下に集まる人々が、やがては大正時代における新しい教養派の出現を約束していたし、また明治44年における西田幾多郎の『善の研究』が当時の青年に与えた感動も大きかった。また他方では、植村正久、内村鑑三、海老名弾正という優れた指導者を有していたキリスト教が、学生達の関心をあつめ、ここに東京神学社や無教会運動が出発したのもこの頃であった。そして白樺派もまたこの

様な動きの一つであったのである。

しかも、この様な動きに共通した一つの性格は、この時代から大正にかけて、近代的自我というものの存り方が、かつてなかった程の激しさをもって追究されただけでなく、これらの優れた師によって触発された弟子達、すなわち大正の担い手たる若きインテリゲンチヤには、師が有していた如き「種」の意識がなかったということである。漱石の「明治の精神」は、既にその弟子達にはなかった。また内村の「愛国心」も受け継がれはしなかった。そして「白樺派」の人々の「特権的地位」に象徴される様なインテリと大衆との分離が、この時代に既に始っていた。「種」は彼らの意識においても現実においても容易に否定さるべきものであり、従って彼らはただちに「人類」もしくは「普遍的なもの」といった「類」との関連において「個」の理想の追究をなすことが可能であったのである。

有島もまたかかる一人であった。彼には、最初から国家というものは意識になかった。彼は、国家を離れたところでキリスト教を求め、自己を追究したのである。

だが、ここで有島においては「個」と「類」の問題がどの様に考えられたかが問題である。そして更に言うならば、有島においては「個」と「類」との真の結合がなされ得なかったのではないかと思われる。

有島にとって、「個」と「類」をつなぐものとして最初にあらわれたのは、当然キリスト教であった。しかし、後の無教会派の人々が、一高において、新渡戸稲造の修養論を通して、人格の観念を教えられ、同時に内村鑑三を通して、^{パーソナリティー}「修養論の難破するところで贖罪の主に出会う」という倫理をこえた宗教体験をもち、そこにおいて、神の普遍的意志につながり、更には人類の救済につながる事が出来たのに対し、同じ新渡戸と内村の影響下にあった有島には、かかる体験はなく、かかる形での「類」とのつながりもない。彼は、キリスト教が、「個」を生かし得ぬものとして、これを放棄する。

すでにみたごとく、棄教後の有島にとっては、如何にして「個」を生かすか

ということが、直接の関心事であった。そして「個」を生かすことにおいてのみ「他」も生かされ「世界」も生かされるというのが、有島の到達点であった。

けれどもわれわれは、有島のこのような努力が、明治43年以来、白樺派の運動の一環としてなされたことを無視することは出来ない。白樺派の人達に共通せる一つのことは、自己のうちにある「人類の意志」を信じ、この「人類の意志」を体現するものとしての強力な個性を確立することであった。そしてこの点では、理性の価値や権威を肯定しながら同時に肉慾をも肯定し、霊と肉、当為と自然、自と他を統一する自我の底に「人類の意志」を認めた武者小路も、²⁵⁾ 霊と肉、自と他の二元的克闘に悩み、ヘダ・ガブラーの如き「矛盾と抱擁した人間全体としての活動」²⁶⁾（『も一度二つの道に就いて』）に、自我の確立を求める「二つの道」を通過して、やがては人間の生の根源としての本能、即ち愛己の本能に「人類の意志」の实在を信じた有島も共に同じ地点に立っていたと言いうるのである。

しかし、この様な自己追究の中に、いわば経験的自己を内在的に超越させる形で、「個」と「類」の結合をはかった有島の立場は、やがて大正の半ばにおいて、彼が社会問題との対決を迫られるにいたって、ここにディレンマを生み出すことになる。

第一世界大戦を通して、インフレが激化し、戦時成金が出現し、労働争議や小作人争議が頻発し、大正7年には米騒動が東京に起る。そしてこの年、武者小路によって田園的な理想社会の建設運動「新しい村」が発足する。武者小路は、この様な情勢の下にも尚「自己＝人類の意志」を信じ、自愛と他愛の自然的調和に基づく「人類愛」を原理として、「新しい村」を実現しようとする。しかし既にクロボトキンや金子喜一によって現存社会の不合理性をよりリアリストティックに学んでいた有島は、この様な試みに敬意を表しながらも、それが失敗に終ることを忠告せざるを得ない。彼は「社会主義というものが当然将来の社会生活を指導すべきもの」であるとして、新たに擡頭して来た労働運動に理解と同情を示す。

しかし有島は、労働運動に負い目を負うものであった。彼が如何に労働に理解と同情を示そうとも、自分自身が親から譲られた農場に寄食する有産者であり「第四階級²⁷⁾に対しては無縁の衆生の一人である」(『宣言一つ』)という一種の劣等感に悩まされた。彼は、大正11年『宣言一つ』をあらわすことにおいて、自分の生活を今後如何にかえても、結局それは「支配階級の所産」に過ぎないと自己を限定し、自己の階級的制約に諦観をもつ。そして又、プロレタリア階級たりえない芸術家としての自分が労働運動に手を出すことは僭越であるとして、自己の仕事を文学の世界にとどめようとする。

しかし、有産者としての負目から逃れ、一介の芸術家として生きようとしていた有島は、やがて「悔悟せる貴族地主」であったトルストイの様に、北海道狩太の農場を開放する、そしてこれを「共産農園」としてかつての小作人達に自主的に経営させる。(大正11年)

だがこの様に、自己を限定し、階級としての自己の運命に諦観した有島にとっては、もはや、かつての自己の二元的克闘を統一し、思想と行動を一元化する筈であった愛己主義の思想は、生きた現実的力たりえない。愛の本能の底に、信じられていた「人類の意志」は、新興プロレタリア階級の要求の前には、もはや「人類の意志」たりえず、それは「行き詰まれるブルジョア」の限定された意志に過ぎない。

有島は、この様な自覚と共に、これ以後、従来彼が属していた文化を見限り、(『文化の末路』)また社会主義という新しい「類」の中で自らの「個」を生かすことも出来ず、孤独なる自己の追究を続けて行くのである。

大正11年から大正12年にかけて、有島の作品には、彼の精神の空虚さを表わし、虚無の深淵をのぞかせる様な数々の作品があらわれてくる。『ドモ又の死』(大正11年)『酒狂』(大正12年)『文化の末路』(大正12年)『瞳なき眼』(詩)(大正12年)『或る施療患者』(大正12年)『独断者の会話』(大正12年)等々がそれである。そして、これ等を通じて、われわれは、有島における自己の追究が、遂には挫折し、虚無の深まりと共に、彼が死への傾斜を急速にたどるのを知るのである。

以上われわれは、有島の生涯に比較的沿いながら、有島における「死に至る精神の歩み」を語って来た。しかし今この稿を終るにあたって、有島を死に至らせた最大の原因は、何であったかを今一度結論的に問うならば、ここではやはり「個」と「類」の分離から来る精神的空虚さをあげなければならないであろう。それは、キリスト教を棄てた故の空虚さであり、いわば真空の中で自己の確立をなそうとした故の空虚さであり、また自己の階級的制約を知った故の空虚さであった。

有島が贖罪信仰という形での宗教的体験をもち得ていたならば、恐らく彼の死はなかったであろう。また彼が社会主義に飛び込みえていたならば、彼の死はなかったであろう。

有島は、大正における典型的な作家といわれ、また彼の死は芥川竜之介の自殺とともに文学者の意識のなかで『大正時代』の終りを象徴する事件であったと言われている。だが、大正時代の一般的性格である「種」からの離脱に加えて、有島においては同時に「類」からの離脱がおこったところに、彼の二重の不幸があったと言わねばならない。そして、この二重の不幸には、彼の罪意識や自己限定に関連をもつ性格上のストイシズムも、いくらかの責任を有したと言えるだろう。

註

- 1) 久山康(編)『近代日本とキリスト教』(大正・昭和篇) 56—7頁
- 2) 唐木順三『自殺について』 36頁
- 3) この部分は源了円「明治以降における知識人の自殺とその精神的背景(1, 知識人と自殺 2, 北村透谷の思想とその自殺)」に負うところが大きい。
- 4) 武田清子『人間観の相剋』 74頁
- 5) 『有島武郎全集』第11巻 189頁
- 6) 同 書 195頁
- 7) 同 書 198頁
- 8) 『有島武郎全集』第3巻「リビングストーン伝の序」 383頁
- 9) 同 書 370—373頁
- 10) 同 書 第3巻 380頁

- 11) 『有島武郎全集』第12巻 115頁“*I bought a revolver this morning. My soul estranges me. My soul does what I most extremely abhorred. I dread it.*”
 - 12) 『有島武郎全集』第1巻 405頁
 - 13) 同 書 375頁
 - 14) 同 書 405頁
 - 15) 『有島武郎全集』第4巻『或る女』201頁
 - 16) 『有島武郎全集』第3巻 385頁
 - 17) 同 書 204頁
 - 18) 『有島武郎全集』第2巻 78頁
 - 19) 『有島武郎全集』第1巻 528頁
 - 20) 同 書 529頁
 - 21) 『有島武郎全集』第2巻「自我の考察」78頁
 - 22) 同 書 79頁
 - 23) 源了円, 前掲論文による
 - 24) 久山康(編)『近代日本とキリスト教』(大正・昭和篇) 136頁
 - 25) 瀬沼茂樹『近代日本文学のなりたち』82頁
 - 26) 『有島武郎全集』第1巻 405頁
 - 27) 『有島武郎全集』第6巻 315頁
- [参考文献(引用したもののほか)] 安川定男「有島武郎研究」(『同時代』) 佐古純一郎『著作集』第7巻, 瀬沼茂樹『有島武郎』本多秋五『白樺派の文学』
- (追記) 本稿は京都大学における総合研究「日本人の自殺」との関連において記されたものであることを断わっておきたい。